通じて、初心の弟子衆は、いつも此猿に負しと也、爰に或浪人、鎗を自慢にて、何とぞ柳生公へ出合度と思ひ、緣を求て至り、對面の後、扨私儀少々鎗を心懸候、乍憚御覽被下といふ、但州聞玉ひ、安き事ながら、先此猿と立合見られよと有時、件の浪人大に腹あしき顏色にて、是はあまりなる事と申に、尤なれども、先立合見られよと有故、是非なく竹刀を持かゝりければ、猿も竹具足に面をかけ、小きしなへを持て、互に立合、彼もの只一突に突倒さんと懸りしに、猿つか〳〵と㒵て、何の造作もなく、件の男を打たり、案に相違し、今一度と望ければ、又一疋の猿を出さるゝに立合、又此猿にたゝかれ、大に面目を失ひ歸り、それより四五十日程は、夜を以て日につぎ精心に工風をつくし、又柳生のもとへ行、對面の上、扨件の猿と立合申度と望ければ、但州聞玉ひ、見申に其方工夫先日よりも殊外上達也、今度は猿ども中々勝事成がたし、夫とも立合見られ候へとて、猿を出さるるに、互に相向ひ、いまだ鑓を出ざるに、猿大に啼て逃しとなり、件の男も、但州の門弟となり、奥義を傳へたりといふ、これ猿さへも、學ぶ所をしれば、人中の有無を知、況や人として妙術を備へまじきや、

〔松屋外集二〕第五猿の劍術

武備志八十六卷陣練教藝三に、影流劍術の目錄并其圖を出せるに、猿の劍術の圖あり、松下見林異稱日本傳中六卷九丁右今按に、及乎足利氏之季、有日向守愛洲移香磨霜刀年久、詣鵜戸權現祈業精、夢神顯猿形示奥秘、名著于世、名家曰陰流、其徒上泉武藏守藤原信綱、用心損益之、號新陰流、有猿飛、猿圍、山影、月影、浮船、浦波、覽行、松風、花車、長短、徹底、磯波等手法云々、

〔倭訓栞中編九佐〕さるまはし　狙公也、莊子に出たり、さるつかひともいふ、朝四暮三の術は、狙に芧を與ふる事也、侯家に必猿まはしを扶持する厩馬の用也、さる木の下にくはし、

〔三十二番職人歌合〕二番　右勝

猿牽